

「佐賀大生を留学させるためのTOEFLプロジェクト」の成果と検証

早瀬 博範^{*1}

Reviewing the Results of the Special TOEFL Project in 2012 at Saga University

Hironori HAYASE

Abstract

This paper reviews and analyzes the results of the six-month Special TOEFL Project at Saga University, which is specially designed with the clear purpose of promoting selected 18 students to go abroad as 10-month exchange students at our sister colleges in English speaking countries. The project has made remarkable results: About 60% of the students has increased their TOEFL-ITP scores between 67 and 5 points, and consequently 5 of them has got passports to study abroad as tuition-exempted exchange students in 2013.

Recently, the English ability of students has been declining in spite of the fact that the level of TOEFL remains the same as before. That is why the university is expected to mend the gap between the students' English level and the TOEFL score requirement. This project proves to meet the students' needs, and the author suggests that this kind of supporting system be established to keep sending many students abroad in a sustainable way.

【キーワード】 TOEFL 大学英語教育 留学支援

はじめに

英語力がもう一步足りずに、留学をあきらめざるを得ない学生が毎年数多くいる。そのような学生の後押しをするために、平成24年度の学長裁量経費で「佐賀大生を留学させるためのTOEFLプロジェクト」(The TOEFL Project for Promoting Sadaisei to Go Abroad)を実施した。全学生の中から18名を選抜し、約半年間TOEFL-ITP得点アップ²のための特別カリキュラムを編成し、筆者とネイティブ教員5名で定期的に対策のための講義を行った。

¹ 佐賀大学 全学教育機構教授 (併任)

² 現在、TOEFL-iBTが公式のTOEFLテストであるが、本学の海外提携校との交換留学の場合、TOEFL-ITPの得点も有効として認めてもらえるように取り決めをしている。従って、本学で提携校への交換留学を考える学生は、TOEFL-ITPのスコアアップを目指している。本プロジェクトでも、TOEFL-ITPに特化した講座とした。

その結果は顕著で、6割の受講生にTOEFL-ITPにおいて67点から5点の得点のアップが見られた。最終的には、平成25年度、本学から英語圏へ長期(本論では10ヶ月以上の派遣をさす)で交換留学生として派遣される7名のうち5名が本プロジェクトの学生で占められ、しかも例年になく高得点で、当初の目的を果たすことができた。

本論では、英語を取り巻く情勢の変化と英語圏留学への本学での実情をふまえ、本プロジェクトの必要性とその成果を分析することで、より一層効果的なプロジェクトとするための検証を行った。

1. 背景

本節では、まず近年の佐賀大学における英語圏への長期留学の現状とそれを取り巻く問題について検証する。

1.1 長期留学の学生の減少

海外留学は、特に若い時期での体験は、学業だけでなく、その後の人生観にも大きく影響を与えるもので、一人でも多くの学生に異文化体験の機会を与えることは、大学の重要なミッションである。学生の海外留学の形も様々あるが、その中でも、海外の姉妹大学へ10ヵ月間交換留学生として留学することが、最も大変ではあるが、その分成果も大きい。従って、この形の留学にこそ、大学の力を多いに発揮し支援することで、一人でも多くの学生を海外に送りこむ必要がある。

しかしながら、近年、本学の場合、英語圏の大学へ長期留学をする学生の数が低迷している。

以下は、本学での長期交換留学生の年度ごとの人数の推移である。



横軸：年度（平成） 縦軸：長期交換留学生の人数（本学提携校への10ヶ月以上の派遣）

以前にも増して「グローバル人材」の育成が大学の主要な課題として課されている時代にあって、これは大きなブレーキとなる。この原因はどこにあるのだろうか。

1.2 「内向き」だけが理由ではない

昨今、留学する学生が激減し、「最近の学生は内向き」だと批判めいて言われることが多い。文部科学省が平成25年月に出した集計によると、海外留学をした日本人の数が年々減少していることが分かる。平成16年度には82,945人が留学していたが、年々減少し、平成22年度には58,060人に落ち込んでいる。経済的に厳しくなり、就職も難しくなっている状況が、若者たちを堅実にし、「内向き思考」にしているのは確かであるが、原因はそれだけではないのではないだろうか。確かに以前の学生に比べると「留学が夢」という学生の数は減少し、留学を勧めると「どうして留学しなければいけないのですか」と聞き返す学生が増えていることは事実である。しかしながら、本学でも留学説明会等を開いているが、その参加人数にあまり変化はなく、留学を希望している学生の潜在的な数はそれほど減少していないのではないかと感じている。

例えば、昨年度と今年度、国際交流推進センター主催で、5月に留学セミナーを開催したところ、100名以上の学生が集まった。集まった学生の数にも驚かされたが、さらに、その9割が英語圏への留学を希望していることに驚きと同時に、何とか彼らの熱い思いを叶えさせてあげることが、大学の重要な使命ではないかと痛感させられた。教員や大学の働きかけがあれば、留学をしたいと思っている学生は多いというのが筆者の実感である。潜在的に行きたい学生は少なくない状況にあるのに、実際に留学する学生が減少している根本原因は何だろうか。

1.3 日本の大学生の英語力の低下

英語圏に留学をする場合の一番のネックは英語力である。確かに経済的な負担も留学のための高いハードルではあるが、本学の長年の国際交流事業の実績として、英語圏への留学でも、授業料不徴収の交換留学生として派遣できるという制度が徐々にではあるが整備され、それほど大きな負担なく留学できるようになっている。この制度を利用する限りは、アメリカなどの場合、年間200万円から250万円かかる経済的負担はなくなる。そうすると、実際上の交換留学のための最大のハードルは英語力ということになる。具体的には、最低でもTOEFL-ITP500点が必要で、さらに大多数の大学が550点を要求している。これは交換留学だけに求められる数値ではなく、経済的な問題をクリアーしたとしても、英語圏への正規留学³をする際に必ず求められる条件なので、どんな形であれ、英語圏に留学する学生にとっては、TOEFLは必ずクリアーしなければならないハードルである。ところが、以前

³ ここでいう「正規留学」とは、外国の大学において、各大学の外国人としての入学許可を取得し、大学の正規の学生となり、一般の学生と同じように単位習得ができる留学のことである。

の学生と比べて、近年このスコアが全国的に低い。この主たる原因としては、近年の英語教育の改革が影響していると言えるだろう。

佐大生に限らず、大学生の英語力は最近様々な形で問題にされている。吉村他(2005)は、「1996年以前と比較して1997年以降の能力値の平均が明らかに低い」(55)と結論づけている。さらに、齊田(2003)は、過去8年間に実施された県全体で行われた英語学力テストを用いて高校1年生12万人を調査した結果、「どの学力層においても、高校入学時の英語能力推定値は、8年間で徐々に低下している」(19)と指摘している。

このような英語力低下の要因の一つとして、よくいわれる「ゆとり教育」が挙げられるだろう。明確な「ゆとり」と言える実例として、英語の場合、学習語彙数の減少に象徴的に見ることができる。以下は、学習指導要領が目安としている語彙数の年代別の変遷である。

	1950年代	1960年代	1970年代	1980年代	1990年代	2000年代	2013年度から
中学	1200-2300	1100-1300	900-1100	900-1050	1000	900	1200
高校	2100-4500	3600	2400-3600	1400-1900	1400	1300	1800
合計	3300-6800	4700-4900	3300-4700	2300-2950	2400	2200	3000

このような状況に対して、最新の学習指導要領の改訂(平成24年度の中学校英語、平成25年度の高校英語)では、語彙数の増加を謳っている。具体的には、中学で1200語、高校で1800語、合計3000語に変更される。もちろん、語彙力とは数だけが重要な訳ではないが、やはり多いにこしたことはないし、TOEFLで500点以上を獲得するには、5000語程度は必要条件となるので、ここを埋める作業はかなり大変である。語彙数だけ見ても、いかに現在の日本の大学生にとって、TOEFLの高得点が難しい状況にあるかが分かる。以前は放っておいても、ある程度の点数は取れていたが、現在ではスタート地点がかなり低くなっていることを大学側、特に英語教員は認識すべきである。しかもこのギャップを埋めるのは、個人レベルでがんばるのはかなり大変で、やはり大学が何らかの対策を講じる必要がある。

3月21日付けの新聞各社の発表によれば、自民党の教育再生実行本部が、TOEFLの得点を「すべての国公立大学、私立大学の入学試験を受ける基準とする」こととし、「平成30年度ごろから導入を想定」しているようである。グローバル化が進む今日、海外留学する学生は減少し、しかも日本は英語力で国際社会に遅れをとっているという分析結果もあるので、このような大胆な案が出てくるのも頷けるが、上述したように、高校卒常時の英語のレベルと、TOEFLが求める英語力に大きな乖離がある状況でのTOEFLテスト導入は、高校現場に大きな混乱を招くだけである。海外留学のための英語力推進のために、TOEFLテストを導入することは多いに賞賛されるべきことではあるが、ただそれを導入するだけでは改善にはならず、むしろ、現状では混乱を招くだけである。TOEFLテストを導入できる環境づくりこそが大事である。

2. 「佐賀大生を留学させるためのTOEFLプロジェクト」

筆者は英語の教員ということもあり、これまで多くの学生を英語圏へ長期留学させてきた。多い時は年間で7名の学生を長期の交換留学生として留学させたこともあったが、平均すると、毎年2名ないし3名を派遣していた。

長期での正規留学のハードルは、経済面と英語力であるが、英語力に関しては、10年ほど前までは、あまり考える必要がなかった。留学を希望する学生の多くが、留学に必要な英語力は十分到達していたので、特段授業等でTOEFLに関する対策をしなければならないという必要性を感じていなかった。ほとんど個人任せでやってこれた。しかし、これは既に過去の話である。

今は、留学はしたいが、英語力が足りない学生が出現する事態が生じており、それが長期留学に行く学生の減少の一因となっている。大学としてもなんとか支援策を講じざるを得なくなっている。

本プロジェクトは、そのような状況での学生支援策の一つの試みとしてとして実施したものである。予想通り、学生のニーズにあった講座開設であったため、全学部から希望者があり、合計で71名の応募があった。詳細は次節で報告する。

2.1 プロジェクトの概要

平成24年4月に学長裁量経費を利用した「教育プロジェクト支援経費」の募集が開始されたので、全学教育機構の事業として応募した。6月に本プロジェクトの採用が決定された。

プロジェクトの主な内容は、次の通りである。

- 1) 全学生の中から希望者を募り、TOEFL-ITPスコアによって上位20名を選抜し、筆者と英語ネイティブ教員5名で5回の特別講義を行う。
- 2) 受講生は、3回のTOEFL-ITPの受験を義務づける。3回分の受験料は全額無料である。
- 3) 本講座の成績優秀者には、本学が実施する海外研修費用の一部を支給する。

筆者とネイティブ教員5名でチームをつくり、月1回のペースで授業を担当することにした。TOEFL-ITPテスト3回分が無料で受講できるというのも、学生にとっては嬉しい条件だったと思われる。勉強にはペースメーカーが必要である。定期的に評価し、どれだけ成果を上げたかを客観的に測り、知ることが勉強を持続させる大事な誘因となる。明確な目標があれば、それを目標にして勉強が続けられる。TOEFLの受験料は1回4000円程度であるが、留学を志している学生は、年に何回もこのテストを受験しており、このプロジェクトに参加できれば、3回も無料で受験できるというのは、経済的負担の緩和になっている。

さらに、講座で好成績を残した学生に、筆者が準備する予定であった海外研修において経済的な補助をするというインセンティブを付けることにした。ただし、今回は協定校との調整が間に合わず、その代わりとして、本学の国際交流推進センターが企画する海外研修プログラムを利用した。センターが企画する海外研修プログラムでは、英語力が問われるが、本プロジェクトの学生は、その基準は十分超えていたので、希望した全員が8万円から10万円の補助金をもらって、研修に参加できた。アンケートによると、このように実質的なインセンティブを与えることも、彼らの大きなモチベーションになった。

2.2 選抜方法

本プロジェクトの採用が決まるとすぐに学生募集に取りかかった。7月25日を応募の締め切りとし募集を開始した。学生センターホームページ、学内掲示板での告知とともに、英語教員全員にお願いし、授業の中でアナウンスしてもらうことで、周知を図った。

応募規定は次の通りである。

- 1) 申し込みの際は、7月25日(水)までに、申込書の提出とともに、TOEFL-iBT, TOEFL-ITP, TOEIC, TOEIC-IPテストのうち、いずれかのスコア表(受験から2年以内)を添付すること。
- 2) 上記テスト等のスコアを持っていない者は、7月14日(土)10時から行う選抜用特別テストを受験すること。選抜用特別テスト受験希望者は、7月10日までに、学生センターの教養教育窓口を受験申請をすること。

20名の選抜はTOEFLの点数によって決定することにし、応募の際にTOEFLスコアのコピーの提出をさせることにした。ただし、既にTOEFLのスコアを持っている者は数少ないので、TOEIC(IPテストを含む)でも受け付けることとした。その際、TOEICスコアは換算式⁴を用いてTOEFLスコアに換算し、今回は採用することにした。もともと、この換算式はよく利用されているが、厳密に言えば、両テストの性格はだいぶ異なるので、やはり参考点でしかない点は注意を要する。今回も、この換算式によって高得点と選抜された学生の中に、実際のTOEFL-ITPでは30点ほど低く、伸び悩んだ。

このようにして募集を呼びかけた結果、全学部から71名の応募があった。これは、留学を希望し、しかも本気で勉強しようと意欲に燃えた学生の数であると言ってよい。しかもこの数字は、このプロジェクトがいかに学生のニーズに合っていたかの証明にもなった。

⁴ 以前、TOEFLテストを制作しているETSは、 $TOEIC \times 0.348 + 296 = TOEFL$ という換算式とその式を使って作られた換算表をホームページに掲載していたが、現在は削除されており、「公式の換算式」は存在しない。理由としては、このときはTOEFLはペーパーテストによるものであるが、現在ペーパーによるテストは公式には実施しておらず、またTOEICも今は、当時とは出題形式が変更になっているからであろう。現在は、ETS Research Reportで、Tannenbaum&Wylieが提案した換算式が最も正確と考えられ使用されている。よって、本プロジェクトでも、その換算式を採用した。換算式は $TOEIC = 3.173 \times TOEFL - 896.923$ である。

71名の応募者のうち、提出できるスコアを持っていない学生30名が選抜テストの受験を希望したので、TOEFL-ITPの模擬試験を実施し、得点を出した。そこで応募者71名全員のTOEFL-ITP及びそれに換算された得点が揃ったので、そこから上位20名を選抜した。ただし、選抜が決まったあと、就職活動や実習等でどうしても受講ができないと2名の学生が辞退を申し出たので、結果、今年度の選抜チームとして18名を決定した。

この18名の学生たちは、TOEFLのスコアとしては、下は480点から上は553点である。本学の英語圏への学部生としての交換留学の最低基準が500点であるが、それは現在2校のみで、他校は550点を要求している。さらに、大学院レベルでの留学となると、600点が最低点となる。今回553点を出した学生は、大学院レベルでの留学を希望している。従って、今回の選抜チームは、TOEFLがもう一步足りないので、ここでしっかりとがんばり留学を実現させたいという学生の集団である。以下の表は、学部ごとの応募者数と選抜された人数である。

学 部	応 募 者 数	選 抜 さ れ た 人 数
文化教育	34	11
経 済	8	1
医 学	10	2
理 工	12	2
農	7	4
合 計	71	20

今回選抜されなかった学生たちは、460点から480点の間が多く、その大部分が1年生である。おそらく、来年には「留学予備軍」となれるのではないかと期待している。今回はトップの学生への支援として本プロジェクトを立ち上げたが、この第2軍に入る学生たちの底上げをすることも大きな課題である。このレベルの学生たちを支援する持続的な体制を整えることが、長期留学の人数を増やすことにもつながるはずである。

3. 実施内容

8月から1月までの間で、講座を五回、TOEFL-ITP受験を3回義務づけた。「成果」としては、TOEFL-ITPのスコアの伸びで判断することにした。

3.1 Strategies for TOEFL-ITP

今回の講義の中心は、以下の2点に絞ることにした。この講義だけで必要な英語力を身につけさせるには物理的に無理であるので、TOEFLの継続的な勉強の仕方、受験のストラテジーに重点をおくことにした。古屋(2008)や田島(2012)も、TOEFLの得点を上げるに

は「学習方略」(Learning Strategy)が決め手となり、しかも最近の日本人学生はそれができていないと、日本人学生のTOEFLの得点が伸びない原因の一つであると分析している。月1回の授業とTOEFL-ITPの受験は、学生が6ヶ月間TOEFLの勉強に集中させるための方略であると同時にペースメーカーである。継続して勉強させる体制に学生たちを追い込むことが重要であると考えた。

TOEFLを制するには、時間を制することが鉄則である⁵。それぞれのセクションで一問を何秒で、あるいは何分で処理する必要があるかをまず知るべきである。そのペースと時間感覚を身につけることが要求される。具体的には、以下の表のような時間配分となる。

Time Control

	Time(minutes)	No. of Questions	Full score	Time per Question
Section 1 (Listening Comprehension)	35	50	68	
Section 2 (Structure and Written Expression)	25	40	68	37.5 seconds
Section 3 (Reading Comprehension)	55	50	67	1.1 minutes
TOTAL	115	140	677	

たとえ英語力はあっても、ゆっくり考えたり、悩んだりしては、TOEFLでの高得点は望めない。いかに短時間で問題を処理できるかの徹底を図った。

TOEFL-ITPは、きわめて特徴的と言えるほど明確な特徴を持っている。その点を熟知し、解答の観点やテクニックを身につけることも重要なスキルである。敵をよく知り、その出方を知ることは、勝利を得るために重要な鍵となる。以下は、TOEFL-ITPの一般的な攻略法と、各セクションに対する具体的かつ実際的な攻略法の一部である。これらを知るとの知らないのでは、結果が大きく違うので、この方略とそのための勉強法の徹底を図った。

⁵ TOEFLを制する攻略として時間のコントロールをあげている指導者は多い。例えば上野は日本人がTOEFLの得点が低い理由として「日常使用時と同等の時間的制約に耐えうる英語力」(161)をあげ、「英文の処理速度」(162)が、Readingだけでなく、Listeningにおいても重要だと指摘している。

General Strategies for TOEFL Score UP

- S1: Study every day
- S2: Time Control
- S3: Vocabulary Power Up
- S4: Change your life into an English Mode
- S5: Keep studying to overcome Plateau
in your favorite way

Strategies for Structure

- S1: 30 seconds per question
- S2: Do not translate into Japanese
- S3: Check out the Subject and the Verb
- S4: Be careful about the Conjunction
- S5: Be careful about the Relative Pronoun

Strategies for Written Expression

- S1: 30 seconds per question
- S2: Do not translate into Japanese
- S3: Check out the Number/
Subject and the Verb/Single or Plural
- S4: Distinguish Adjectives and Adverbs
- S5: Check if the same parts of speech are
lined up

Strategies for Reading Comprehension

- S1: 10 seconds per question
- S2: Read the first sentence carefully
- S3: Read the question first, then find its
answer in the essay
- S4: Process of Elimination

3.2 語彙力

一般的にも、TOEFL克服の重要課題の一つに語彙力が挙げられるが、近年特にこの点が弱い。それは、前述したように、近年の「コミュニケーション重視の英語教育」の重視から、高校までの必修語彙が減らされていることが原因である。TOEFL550点レベルを取得するには、最低でも6000語の語彙力は不可欠である。本プロジェクトの学生たちは、TOEFL480以上の学生なので、少なくとも高校必修レベルの4000語程度はある程度習得済みと判断できるので、本プロジェクトでは、4000語から6000語へ、つまり2000語の語彙力アップを課題とした。田島(2012)も、特に「英語力上位層にいる学生の課題は難易度のある語彙の強化」(33)であると強調している。もっとも、4000語レベルまでの単語に問題があれば、英語力の基盤が弱いということになるので、その点も十分考慮する必要がある。

具体的には、筆者がTOEFL問題で頻出している単語の一覧表を独自で作成し、それをWORDファイルで各学生にメールで配信した。WORDファイルで作成されているので、例えば、よく知っている単語は削除したり、必要な例文や情報は加筆したりして、自分に合った単語帳を作成できるというメリットがある。

語彙力とは、単に意味が分かることを言うのではなく、適切に使えるということであるので、「注意すべき用法・用例」の項目を入れた。さらに、単語は派生的に理解することで、効率的に憶えることができるので、「関連語」という項目も充実させた。以下は、その一部である。

	単語	意味	注意すべき用法・用例	関連語
<input type="checkbox"/>	adopt	採用する		adoption(n)
<input type="checkbox"/>	afford	余裕がある	I can't afford a new car. 「新しい車を買う余裕はない」	
<input type="checkbox"/>	concentrate	集中する	(熟) concentrate <u>on</u>	concentration(n)
<input type="checkbox"/>	effect	結果、効果	the effect of smoking <u>on</u> your health 「喫煙が健康に与える影響」	effective(a), effectively(ad)
<input type="checkbox"/>	include	含む	Lunch is not included <u>in</u> the price.	contain(類)
<input type="checkbox"/>	invent	発明する		invention(n)
<input type="checkbox"/>	enable	可能にさせる	Email has <u>enabled</u> people living in different countries <u>to communicate</u> easily.	cf. able 「することができる」
<input type="checkbox"/>	physically	物理的に、身体的に		physical(n), mentally(反)

同様に、TOEFL頻出の熟語表も独自で作成し配布し、教材とした。本来であれば、この表を使った確認テストを定期的に行い、持続的な学習へつなげる予定であったが、時間的な制約の中で、数回しか実施できなかった。講座として今後改善を図りたい。

3.3 英語学習カルテの作成と活用

今回選抜された18名の学生は、TOEFLの得点も、その弱点や学習のバックグラウンドも異なる。さらに留学の目的も多様である。そこで、各学生の特性を知り、一人一人に合った学習が続けられるように「英語学習カルテ」を作った。これは学生ではなく、筆者が作成し、TOEFL-ITPの結果が出た際に、個別に面談を行い、テスト結果の分析とその対応策、さらには学習状況や問題点、留学相談も行い、その状況を記録することにした。これは、特に各学生の学習メニューを提案する際に、大いに役立った。

4. 成果分析

学生が選抜時の英語力からどれだけ伸びたかはTOEFLスコアの推移によって判断することができる。個々の学生の結果を詳細に分析することで、この講座のあり方、実施内容の検証を行った。

4.1 スコアの推移

以下は、各学生の「選抜時」のTOEFL-ITPのスコアと、各3回実施したテストのスコアである。「成果」は、右端の欄の「上昇した点数」で示しており、「選抜時」のスコアと比較して、何点伸びたかを示している。太字の数字は、その学生の最高得点である。選抜時よりもマイナスになった学生も数名いるが、最高得点は2年間有効で消えることは

ないし、本プロジェクトの目的は「いかに上昇させられるか」なので、マイナスの人や変化のなかった人は、空欄のままにしている。

学生	選抜時	第一回目 TOEFL	第2回目 TOEFL	第3回目 TOEFL	上昇した 点数
A	540	550	533	550	+10
B	553	540	550	580	+27
C	503	460	480	500	
D	*528	477	480	490	
E	550	557	547	570	+20
F	530	530	533	537	+7
G	500	500	503	510	+10
H	483	480	483	490	+7
I	*527	483	503	533	+6
J	497	440	457	480	
K	487	463	493	470	+6
L	553	553	620	580	+67
M	496	463	477	483	
N	*537	530	530	537	
O	490	523	540	540	+50
P	480	417	450	480	
Q	*482	460	460	487	+5
H	500	460	470	490	

注1) *の数字は、TOEICテストの点数をTOEFL-ITPに換算した点数。

注2) 太字の数字は、その学生の最高得点。2年間有効。

注3) 第1回目TOEFLは8月25日、第2回目は10月26日、第3回目は1月26日に実施した。

この表が示しているように、6割の学生がスコアが上昇した。最高で67点で、最低でも5点である。しかも、長期交換留学に必要な最低得点である500点以上が11名、その内、英米の多くの大学が要求する550点以上の学生を4名を出すことができた。このレベルの学生は、実際のところなかなかTOEFLは伸びにくいのが現状であることを考慮すれば、顕著な成果だと言える。この講座の受講生は、これまでも一人ががんばってきて、個人でやれることはやっているのに、やや頭打ちになっていて、留学にもう一步届かないと、苦しい状況にある学生たちであった。しかし、今回の結果で分かるように、支援の手を差し伸べると、伸ばすことができるのである。そのような学生の一人で、ここまで一人でコツコツと2年間がんばってきた学生が、「TOEFLのスコアも、伸びるものなのですね」と嬉しそうに話っていた。

残念ながら、選抜時よりも下がった学生が数名いた。TOEFLのスコアも多少上下する。学生の力もまだ安定的ではないので、良い時と悪い時がある。これを克服するには、安定した実力と、コンスタントに上昇するように学習方法や内容を吟味する必要がある、やや時間もかかる。選抜時よりも点数が下がった学生の中に、選抜時にTOEICのスコアをTOEFLに換算して使用した者が含まれているが、前述したように、TOEICスコアはもう少し低く考える必要があるだろうし、やはりTOEFLの模擬試験を課し、選抜するべきだったのかもしれない。

4.2 留学者の増加とレベルアップ

上記の表が示すように、本プロジェクトの学生たちはスコアが上昇したことで、半数以上が長期の交換留学を勝ち取ることができたり、奨学資金をもらって短期の語学研修に参加できるという成果を挙げた。平成25年度に英語圏の大学で長期の交換留学生在が7名の選考が決定しているが、そのうち5名が本プロジェクトの学生から選ばれた。5名のスコアは533点から620点の幅である。これは、平成23年度に交換留学に行った2名の学生がスコアが490点から540点、平成24年度が5名で、500点から573点であることと比べると、本プロジェクトの学生たちが平成25年度の交換留学の選抜のレベルを上げたことは明白である。

1ヶ月の短期海外語学研修でも、英語の能力が証明され、プロジェクトの学生5名が8万円から10万円の経済援助をもらって参加した。

約半年間の短いプロジェクトではあったが、このように目に見える成果を上げることができた。やはり持続的に学習しなければならない環境に学生たちをおいてやり、明確な目標を持たせ、効率的な学習方法を教授することが、このプロジェクトが成果を上げた理由である。

5. まとめ：検証と課題

今回の試みによって、このようなプロジェクトが学生のニーズにいかにか合致していたかが証明された。しかも、期間が短いということもあり、英語力をしっかり鍛えるというのは今回は目的とはせず、彼らが持続的にかつ効率的に勉強できる支援体制を作ってやることを心がけたが、このレベルの学生たちにとって、それで十分であったと思われる。6割の学生がTOEFL-ITPスコアを、高いもので67点、少ないものでも5点上昇させたこと、そしてその結果、3分の1の学生が高い点数で交換留学のパスポートを手にしたことは、このプロジェクトの明確な成果と言えるだろう。

しかしながら、以下に示す通り、今後に向けての課題も見つかった。

1) 講座の回数の増加と持続的な支援体制

今回のプロジェクトでは、上記クラスの学生であったため、支援と受験のためのストラテジーに特化した。可能であれば、英語力そのものを強化するために、もっと講座の回数を増やす必要もあるだろう。それと、TOEFLのスコアに限らず、教育の成果を出すには、半期という短い期間ではなく、最低一年のスパンが必要と考えられるので、より長期的な支援体制を構築する必要がある。しかも、専門の授業や就職活動で忙しくなる前の早い時期からスタートするのがベストである。

2) 「第2軍」への持続的な働きかけ

今回のプロジェクトでは、上位の学生に対する支援であったが、長期的に考えると、その次のランクに位置される学生への支援も重要である。今回このプロジェクトに応募を希望した大多数の学生が、この位置にいて、しかも多くが1年生である。このような「留学予備軍」を長期的に支援する体制こそ、持続的に派遣学生を増加させるには重要であり、本学のように留学を希望する学生が多い状況では、大学としてそのような学生の育成と支援体制の確立は急務である。

3) 海外研修プログラムの充実と交換留学可能な提携校の拡大

今回、この講座の受講生が英語圏への交換留学の英語力のレベルを上げる結果となった。交換留学を勝ち取った7名のうち、5名が本プロジェクト生であり、うち4名が550点以上を取得し、彼らが英語圏への留学の枠のほとんどを埋めてしまった。500点で交換留学ができるはずの大学にも彼らが希望し、本プロジェクト生で530点数を取得しているにも関わらず、留学ができなかった。海外提携校の拡大も同時進行で進めなければならない。

今後の日本の将来を考えると、グローバルな人材の養成は大学の重要なミッションである。今回のプロジェクトによって得られた課題を踏まえ、来年度は更に充実したプロジェクトに育てたい。同時に、早い時期からの恒常的な留学支援体制を構築することも大学の教育支援として進めることが望まれる。

参考文献

- 上野輝夫(2008)「日本語母語話者はなぜTOEFLの得点が低いのか:理由の考察と英語学習法の一提案」
『関西福祉大学社会学部紀要』No. 12. 157-166.
- 小野博(2007)『日本人大学生を対象とした日本語・英語教育—リメディアル教育から実力養成教育への展開—』平成16~18年度科学研究費報告書.
- 木村松雄、遠藤健治(2012)「英語熟達度(TOEFL)英語学習方略(SILL)に特化した経年的研究」『青山

- スタンダード論集』7、151-174.
- 齊田智里(2003)「高校入学時の英語能力値の年次推移」*STEP BULLETIN* Vol.15 12-21.
- 高橋邦年、田島祐規子他(2008)「続・TOEFL対策授業の有効性に関する調査研究」『横浜国立大学教育人間科学紀要I』No.10. 115-124.
- 田島祐規子(2012)「二テストから観察する初年度生の英語力」『横浜国立大学大学教育総合センター紀要』第2号、27-34.
- 古屋則子(2008)「なぜTOEFLのスコアは伸びないのかー学習方略の必要性ー」『文化女子大学紀要』Vol.16. 141-151.
- 文部科学省「日本人の海外留学状況」2013.02.
http://www.mext.go.jp/b_menu/houdou/25/02/_icsFiles/afieldfile/2013/02/08/1330698_01.pdf
- 吉村幸他(2005)「大学入試センター試験既出問題を利用した共通受験者計画による英語学力の経年変化の調査」『日本テスト学会誌』Vol.1 No.1 52-58.
- Tannenbaum, Richard & Caroline Wylie (2005). “Mapping English Language Proficiency Test Scores onto the Common European Framework.” *ETS Research Report* No. RR-80. 46.